日仏演劇協会編

今日のフランス演劇

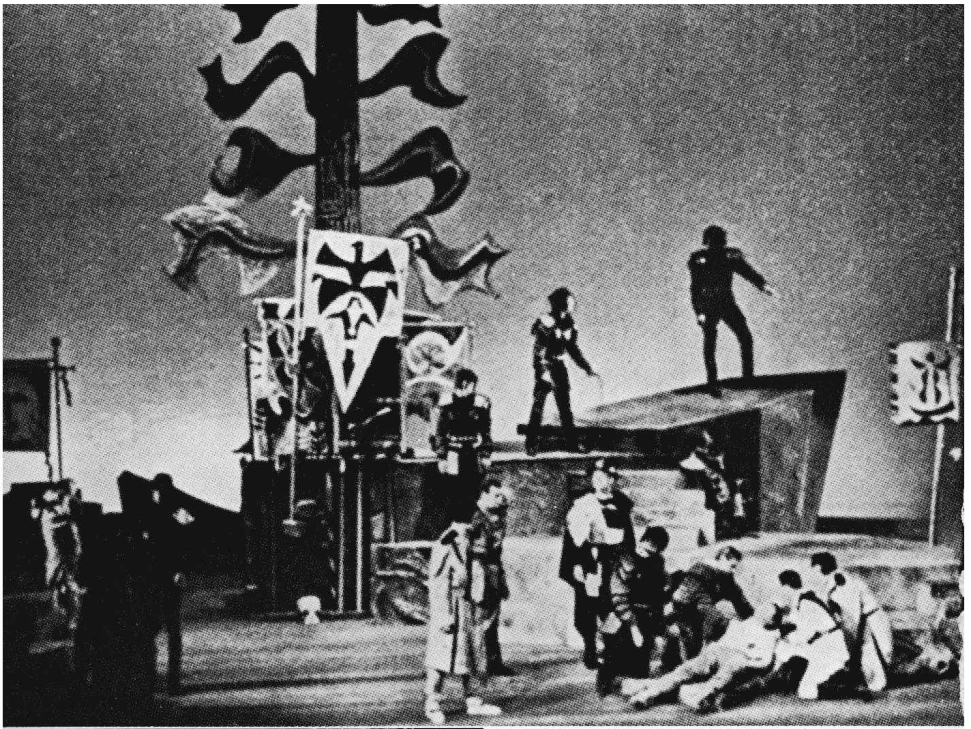
4

白水社

日仏演劇協会編
今日のフランス演劇　4
定価　八五〇円
一九六七年三月一五日　印刷
一九六七年三月二五日　発行

©

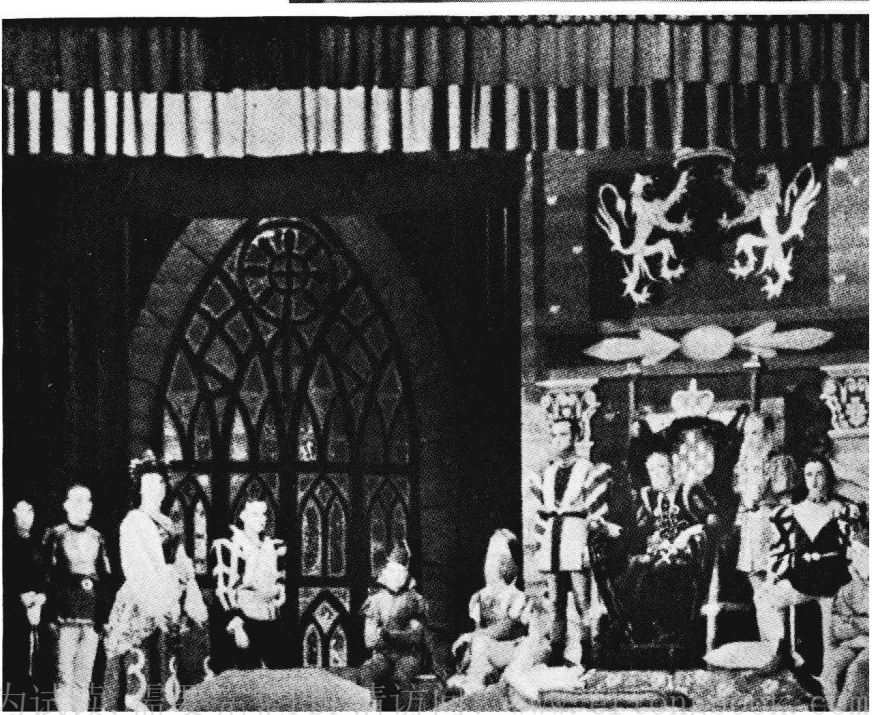
訳者　渡辺守章　安堂信也　矢代秋雄　宮島春彦　岩瀬孝　佐藤実枝　篠沢秀夫
発行者　草野貞之
印刷者　白井倉之助
発行所　株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京三三二二八
本製社岳松・刷印社社興精



黄金の頭

テアトル・ド・フランス上演　1959

火刑台上のジャーヌ・ダルク
オペラ座上演　1952
〈撮影　浦　太郎〉



死せる女王
強制収容所のフランス人捕虜による上演　1944

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ベケット

モンパルナス－ガストン・バティ座上演　1959

サンチャゴの騎士長

コメディー・フランセーズ上演　1948

目次

黄金の頭……7
火刑台上のジャーヌ・ダルク……139
死せる女王……171
サンチャゴの騎士長……233
ベケット――神の名誉――……281
解説（渡辺　守章）……379

ポール・クローデル 作

渡辺 守章 訳

黄金の頭（かしら）（第二稿）

Paul Claudel
TÊTE D'OR
(2me version)
1894

人物

シモン・アニェル――黄金の頭――国王
セベス
皇帝ダヴィッド
王女
ウメール
カシュス
他に多くの男女の役

第一部

冬の終わりの平原。
舞台奥より、シモン・アニェル登場。シャツ姿、肩に女の死体をかつぎ、シャベルを持って。
舞台前面に、ゆるやかな足取りで、セベス登場。

セベス　ぼくだ、
愚かで、無知な男、
未知なる万物を前に立つ、新しい人間、
今ぼくは顔を歳月の司と、雨を降らす天穹へと向ける、
　そのぼくの心に倦怠は満ちあふれている！
何も知らない、何もできない。何を言い、何をすると言う？
何に用いようか、垂れ下がるこの両の手、この両の足を、
夜の夢のようにぼくを連れ歩くだけの足を？
言葉はただ一つの音、書物はただの紙切れ。
誰もいない、ぼくのほか、ここには。ところがすでにすべてが、
煙る大気も、豊かな耕地も、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

また、樹々も、あるいは垂れこめた雲まで、ぼくに話しかけてくるように思える、言葉を持たぬ言葉で、その意味は定かではないが。
耕す人は
鋤を手に家路を急ぐ。叫ぶ声がする、こんな遅い時刻に。
女たちが井戸に行く時間だ。
夜になった。――いったい何者なのだ、ぼくとは？
することは何？　待っているものは何？
答えはこうだ。ぼくには分からない！　そのぼくの心の中では
泣きたい、叫びたい、
いや、笑うのだ、跳ねまわり、腕を振りまわすのだ！
ボクハナニモノダ？　まだ雪は点々と残り、この手には、
猫柳、一枝。
いかにも三月は、青い枝に火を起こそうと息吹きかける女にも似ている。
――ああ、夏と
太陽の下、恐ろしい昼間の時が忘れ去られればよい！
ここにある万物よ、
お前たちに捧げよう、このぼくを！
ぼくには分からない！
見てくれ、ぼくを！　必要なのだ、ぼくには、
だが、何をだか、ぼくには分からぬ、それにぼくだって、
果てしなく叫び出すかも知れないのだ、
大声で、小声で、遠くで泣く子供の声、赤い熾火のかたわらに一人ぼっち、とり残された子供のように。
おお、苦い悲しみの空よ！　樹々よ、大地よ！　闇よ、雨をはらんだ夕べよ！
見てくれ、このぼくを！　拒まないでほしい、この願いを、ぼくの立てた願いを！

（シモンに気づく）

あれは？　誰だ、あそこで穴を掘っているのは。

（彼に近づく）

土管でも埋めようと言うのですか。もう遅いのに。
シモン　（立ち上がり）誰だ？　なんの用だ。
セベス　何を、そこでしているんです、いったい。
シモン　この畑はお前さんの土地か？
セベス　家のです。
シモン　この穴だけ掘らせてくれ。
セベス　（死体に気づいて）やっ！
なんです、これは？
シモン　（穴を掘り続けながら）おれといっしょにいた女だ。
セベス　ああ！

この女は、この女は？　ぼくの知っている女だ！　この女は死んでる？
シモン　おれが殺したわけじゃない。
セベス　あの女だ、確かにあの女だ！　ああ、なんてことだ！
こんな姿でまた会うとは。すっかり冷たくなって、こんなに濡れて！　ああ、誰にも優しかった君。よく笑い、あんなに活気にあふれていたのに、
ほんとうに君なのか？　君が、君が、こんな！
シモン　セベスか！
セベス　なんだって？　ぼくを知っているのか？
シモン　あのスレートの鐘楼は、なんだ、セベス。この土地は、なんだ。
セベス　アニェル！　シモン・アニェル！
シモン　静かに。家には、誰かいるか？
セベス　誰も。
家は売られてしまった。
シモン　おれの親爺は、まだ生きているか？
セベス　死んだ。お袋さんも、死んだよ。
それから、ほかの連中は、みんな出て行ってしまった。
シモン　それでいいのだ。
セベス　あんな風に、どこへ行っていたのだ。なぜ旅に出た？
それに、ここにいるこの女は？
シモン　なぜ？　誰に分かる。
今でも覚えているのは、猛り立つ心、恥の思い、道なきところまでも行ってしまいたい、お前も見て知っている平野の連なる彼方へ行きたいという欲望だ。
で、おれは家を出た、家族の面など後に残して。
死人だ、すべて！
セベス　どこへ行ったのだ。
シモン　おれはまったく知らなかった、この女がおれを愛していようなどとは。
ある日、この女の首筋をこの両手でつかみ、おれは激しく納屋の壁に女を押しつけた。
おれは荒々しい気性の持主だったからな。女はおれを追って来た。
おれは放浪したのだ。
おびただしい夢を育てた。おれは知った、
人間たちというものを、そして現在という瞬間に存在するすべての物を。
おれは見た、ほかの道を、ほかの農地を、ほかの町を。
通り過ぎて行く、そしてすべてのものも過ぎ去った。
それからはるかあなたの海だ、そして海よりもさらに遠

くまで！
そしてそこから、もみの木の一枝をたずさえ、おれが戻って来る道すがら……
セベス　そこであんたに出会ったのか、この女は？
シモン　二人して、
あまたの山と河とを越え、おれたちは再び下って行った、南の国へ、また別の海へと。
それから戻って来たのだ、ここに。
セベス　どこにだ？
シモン　あそこにある、あの小屋だ。火をたこうと思った、が、湿っていすぎた。
——深さはいいかな、こんなもので。
（穴から出る）
セベス　こんな、浅ましい姿になりはてて、地面に横たわっている！
シモン　土地よ、土地よ！
この地から、おれの汚らわしい目を外らして、おれの捜し求めたものは、ほかならぬ
すべての人間たちの間にあっておれが何者であるか、それを証す証明ではなかったか？
ところがほかならぬこの地からそれはやって来たのだ、足に脛当てをつけて、おれを捜しに。
立ったままで、頂は陽の炎の熱気に燃えさかる髪の毛、真赤なおれたち、
おれたちは互いの魂を唇で結びあわせた、すると女は、無邪気な腕でおれを堅く抱きしめたのだ。
それからおれは女をこの土地へ連れて戻った、おれが去ったこの土地が、おれをあざけるようにとだ！　それが、今、女はおれの足もとに倒れている。
この土地に呪いあれ！　この土地の牛という牛はくたばるがよい！　豚という豚は咳に喉をつまらせて死ねばよいのだ！
ああ、ああ！　土地よ！　粘土の、執拗にからみつく土よ！
下劣な男だ、おれは！　おれに何ができよう。なんのたしになるのか。ああ！　おれは、どうして望んだのだ、おれが現にそうである以外のものに成り変わろうと。そして今、ここで
おれはただ一人、大地に足を踏み込んで、この荒々しい叫びを発するのだ、
すると吹きつける風はおれの顔に、雨の仮面をたたきつけて行く！
ああ、女よ、忠実な者よ！
どんなところにも、愚痴一つこぼさず、お前はおれにつ

いて来た、
まるで買いとられた妖精のように、血まみれの両足を金のぼろ布に包む女王のように。
こう言ってお前を呼んだものだ、「この泥を飲め！」と。
なまなましい嫌悪、屈辱、欲望のあふれる恥辱、最後にようやくおれにはお前というものを自分のものにすることができた、知恵を学ぶようにな。
――聞いてくれ、今からおれの言うことを。死ぬ時、この女、おれの手を取って頬に押し当て、
その手に接吻した、じっとおれを見つめながら、
そして言った、あたしはあなたのために前兆を歌うことができる、
海の果てに行きついた古い船のようにです。
そして最後に女は、今はの際に、語り、かつ泣くのだった、何か知らぬ物を目のあたりにし、それを悔やんで。

セベス　一人きりで、すっかり血の気を失ってしまった。

シモン　この女はそれからおれを見つめ、涙を流し、燃える唇でしきりにおれの手に口づけをした。
そこで、おれは言ってやった、「苦しいか」と。女は頭を振るだけだ。
ただただおれを見つめる女、おれには女の言いたいことが分からなかった。第一、女など、誰に分かる？
さあ、穴の中に行け！
（彼は死体を持ち上げかける）

セベス　手伝おう。

シモン　そうしてくれ。
そうしてもらいたい、おれといっしょにやるのだ、そしてこのことは、忘れられてはならん。
（二人で死体を持ち上げる）
そうではない！　顔を地面の底に向けて横たわるように。
（二人は女を穴の中におろす、女の顔の方を下に向けて）

セベス　この人が休らうように。

シモン　行け、はいるのだ、はいるのだ、なまなましい土の中に、じかにな！　お前にはもはや何も聞こえず、何も見えぬ場所へ、そう、口を土に密着させて、
そうだおれたちが腹ばいに枕をつかみ、眠りへ向かって身を投じる時のようにだ！
さあ、これからお前の背中に、重く土を盛ってやろう！
（彼は両手で穴に土を入れる、穴が土で埋まると、彼はその上に乗って、足で踏み固める）
完全にふさぐのだ、これを！　お前の体の分だけ土が残っている。

――それじゃ、おれの家には誰もいないのだな？
セベス　誰も。どこも閉まっている。土地は荒れ放題だ。
（沈黙）
彼女の父親はまだ生きている。
シモン　何を言う？　あの男の家へ行って寝かしてくれと頼むのか？
セベス　もうずいぶんの歳だ。ひどくつらい目に会って来たのだから。
一人きりで暮らしている、他人様のお情けにすがってね。みんな軽蔑しているのさ。
背は曲がって、まるで鎌のようだ、手は膝まで垂れ下がっている。娘が家出したショックから、ついに立ち直れないのだ。
シモン　おれはこの国の中へは足を踏み込まん。
穴が分かるかな、上から。
セベス　なんにも見えない。雨も降るし。
シモン　さまざまのことを教えてくれた女よ！
世の常の人とは異なる声で語りかけ、おれの前にその顔を、一冊の書物のように掲げていたお前よ！
今は休め、室の内にある種子よりも深く、
道の、畠の物音も、鋤も種子播く機械のうめく声も、もはや聞こえぬ場所で。
おれのみ知っていた女よ、この場所はいかなる人も知らず、
このシャベルも、お前の杖さえも、船乗りの折れた櫂のごとく
そこに立てられて残ることがあってはならぬ。
（彼は遠くにシャベルを投げる）
さあ、今は行くのだ。
セベス　いっしょに行かせてほしい。
シモン　来い。
口をきかないのか、相棒。
（二人はそろって歩く）
セベス　悲しいのだ、ぼくは。悲しいのだ！　とても、とても。
シモン　死か！
さまざまな考え、
行動、それが眠るのだ、あたかも新生児が
腿を腹の方につけて、母親の胎内の形に体を再び折り曲げるのに似ている。
人は生きることをやめる。
思い出、老年！　病人は
一人、目を覚ます、すると、雨が窓ガラスを激しく打つ、
下では銀の匙の落ちる音が聞こえる。

こうして、微笑が、歳老いた人々には教えられて来たのだ。

（沈黙）

セベス　彼女は死んだ。

シモン　一人の女がおれのところからその手を引っこめたのだ、おれから目を外らして、あれは奇妙な様子だった。

そしてこのおれが、男であるおれが一人残った。ここから

おれが大気を吸う口をさし出す空の冷たくほのぼの明けの岸辺とはどこか？

沈黙の中でおれが自らに繰り返し語ったことは？「おれにはできる、おれはやってみる……」

ああ！　どこに目をやればよい？　どこを歩くのか？

空は鋼だ、そしておれはここにとどまっている。女の遺した遺産だ、無気味に脅かす力と、苦痛の叫びに満ち満ちているこのおれ。

なんだと？　おれが何を試すという？　おれは放浪した、おれは見たのだ。おお、いかにもはかない日々よ、日付なんぞ！　いったい、何に

用いようか、おれの体が山となって

五体を林のように逆立てる時、おれのうちのこのおびただしい群集を？

若い女はもはや死んだのだ。

しかしそれでも——ゆうべのこと、女は眠っている、おれは外へ出た、

明日は、おれ一人になるのだと知りながら。

夜だった、そしておれの心は綱の先に縛りつけた石よりも重かった。

ところがだ、おれが歩くにつれて、しだいしだいにおれは感じて来た、おれのものであるこの生命を、このどんな妻も持ち得ず、生み落とされたものではない、おれ自身のなかにある本質的な機能をだ。

セベス　許してもらえようか、ぼくにも……

だが、ぼくのことなど、誰も気にしてはいない。

シモン　どう言うことだ。

セベス　こう言ったら……

ぼくだって、あんたに分かってもらえるように、自分の不幸を訴えられる……

シモン　誰か女が原因で……？

セベス　違う。

シモン　お前にも分かるな、この

子供みたいな顔した人間、そいつに覚えるこの感情は

奇妙なものだ。女たちの陽気さは本物ではないと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com